

氏名(本籍地)	本田周二(東京都)		
学位の種類	博士(社会心理学)		
報告・学位記番号	甲第359号(甲心第3号)		
学位記授与の日付	平成26年3月25日		
学位記授与の要件	本学学位規則第3条第1項該当		
学位論文題目	現代青年における友人関係の特徴に関する社会心理学的研究		
論文審査委員	主査 教授	文学博士	安藤清志
	副査 教授		堀毛一也
	副査 教授	Ph.D.	黒澤香
	副査	元本学教授/慶應義塾大学教授 博士(社会学)	今井芳昭

【論文審査・審査結果】

社会心理学のさまざまな研究領域の中で、親密な対人関係の研究は比較的新しく、1980年代から活発に行われるようになった。近年では「関係科学(relationship science)」という言葉も用いられるようになり、主要な研究領域の一つになっている。しかし、夫婦関係や恋愛関係など異性間関係を対象にした研究が中心であり、同性の友人関係を扱った研究は必ずしも多くなかった。このような状況の中で、本田論文は、現代青年の友人関係のあり方について、とくに関係の構築・維持の基底にある動機づけという観点を中心に社会心理学的分析を試みたものである。

まず、第1章では、友人関係の問題を俯瞰するため、これまで実施されてきた社会調査の結果や社会学の知見を幅広く検討し、日本の青少年が他国の青少年よりも友人関係に重きを置いていること、重要であるがゆえに多大な気遣いの中で友人とのコミュニケーションをとっていること、携帯電話が親密さを促進するための有益なツールと位置づけていること、つき合っている友人の数が10人程度であること、などの特徴を抽出した。また、社会学の領域では、友人関係の希薄化、友人関係を捉える視点の多様性、選択的な友人関係の形成といった視点から現代青年の友人関係の特徴に言及がなされていることを指摘し、心理学的分析への方向づけがなされた。第2章では、友人関係の定義を整理した上で、親密な対人関係の形成と持続に関わる心理学理論が代表的な実証研究とともに説明され、さらに、友人関係のさまざまな機能が、自己の発達や社会生活における適応的側面を中心にまとめられた。次に、これらの検討に基づいて、親密な友人関係をもつことと個人のパーソナリティや精神的健康との関係を扱った研究が概観され、全体的に、親密な友人関係の

中で積極的なコミュニケーションを取ることが精神的健康を促進することが示唆された。最後に、友人関係の心理学的分析と、1章において示された現代青年の友人関係の特徴が総合的に検討され、友人関係の特徴としてしばしば指摘される希薄化を、友人を捉える範囲の広がりやつき合い方の多様化という観点から捉えることが有用であることが主張された。

第3章は、本論文の理論編の中心部分であり、友人関係における多様な動機づけを自己決定理論を基礎に分類する枠組みが提唱されている。具体的には、岡田（2005）が開発した「友人関係における動機づけ尺度」を基盤にして、自律性の程度によって友人関係への動機づけを4つに分類し、それを多様な友人関係に対応させようとする試みがなされた。すなわち、外的な報酬や他者からの働きかけによる関係である「外的」、不安や義務感が基盤にある「取り入れ」、個人的に重要であるために自発的になされる「同一化」、興味や楽しさなどのポジティブな感情によって動機づけられる「内発」の4つである。このうち、「内発」と「同一化」に基づく友人関係は親密さに基づく友人関係であり、「取り入れ」や「外的」に基づく友人関係は、表面的な友人関係や、過度の気遣いに基づく友人関係に対応していると考えられた。

以上の考察に基づき、続く各章（5章～7章）では実証的研究の結果（研究1～研究9）が報告されている。第5章は、現代青年の友人に対するイメージや友人数が多いことに伴う対人印象の特徴等について基礎的な検討を行った結果が報告された。具体的には、「友人」として認識される他者との関係は、従来の定義で強調されてきた相互援助や楽しさだけでなく、打算的であるなどネガティブな側面を持つものもあること（研究1）、友人の数が多い人のイメージは、「明るい」「信頼できる」「思いやりがある」など、パーソナリティの5因子モデルの外向性、調和性、誠実性の高さに対応しており、友人の数が少ない人のイメージは、「暗い」「人見知り」「自己中心的」など、外向性、調和性、誠実性の低さに対応していること（研究2）が報告された。続く研究3と研究4では質問紙実験の手法が用いられ、それぞれ、友人の数が多い人は少ない人に比べて「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「力本性」が高いと判断されること（研究3）、共同作業時の意見対立において、自分の主張を一方的に通すような行動をあまり取らないと推測されること（研究4）などが示された。

第6章（研究5、研究6）は実証編の中心的部分であり、友人関係における動機づけと自尊感情および精神的健康との関連性が検討された。まず、研究5では、友人関係における動機づけと友人数（親しい同性友人のイニシャル数、携帯電話に登録している友人数）および友人関係満足感との関連について明らかにするために男女672名の大学生を対象に調査が実施された結果、男性においては、自己決定性の高い動機づけである「同一化」が携帯電話に登録している友人数、友人関係満足感を促進すること、自己決定性の低い動機

づけである「取り入れ」は友人関係満足感を抑制することが明らかとなった。一方、女性の場合は、「同一化」は、親しい友人の数、携帯電話に登録している友人数、友人関係満足感を促進すること、「取り入れ」は、携帯電話に登録している友人数、友人関係満足感を抑制すること、「外的」は友人関係満足感を抑制することが示された。研究6では、男女大学生221名を対象にして、友人関係における動機づけと自尊感情・生活満足感との関連について検討され、男女ともに、自己決定性の高い動機づけである「同一化」が全般的な生活満足感や学校生活満足感を促進していた。自尊感情に関しては、動機づけとの関連が認められなかった。研究5と研究6においては、自己決定性の高い動機づけとつき合いの多さ、友人関係満足感、精神的健康との間には正の相関が見られ、自己決定性の低い動機づけと友人つき合いの多さ、友人関係満足感の間には負の相関が見られた。しかし、精神的健康との関連は見られなかった。全般的に、自己決定性の高い動機づけは精神的健康を促進するが、自己決定性の低い動機づけでも必ずしも精神的健康を抑制することはないことが示唆された。

第7章では、友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションとの関連について検討が行われた（研究7～研究9）。研究7では、「最も親しい同性友人」に焦点が当てられ、友人関係における動機づけと対面および携帯でのコミュニケーションとの関連について検討が行われた。その結果、男女とも、自己決定性の高い動機づけである「同一化」が対面、携帯（通話）での課題的コミュニケーション、対面での情緒的コミュニケーションを促進することが明らかとなった。一方、自己決定性の低い動機づけとの関連は見られなかった。研究8でも、「最も親しい同性友人」の場合、友人関係における動機づけが対人葛藤時の対処方略にどのような影響を及ぼすかが検討された。その結果、「同一化」が統合スタイルおよび相互妥協スタイルを促進すること、自己決定性の低い動機づけである「取り入れ」は回避スタイル、自己譲歩スタイル、相互妥協スタイルを、また、「外的」は強制スタイルを促進することが明らかとなった。研究9では、「親密さの程度の低い同性友人」に焦点を当てて、友人関係における動機づけと対面および携帯でのコミュニケーション、対人葛藤時の対処方略との関連性が検討された。その結果、男性では「同一化」が対面および携帯メールでのコンサマトリーのコミュニケーションを促進すること、「取り入れ」が対面、携帯メールでのコンサマトリーのコミュニケーションを抑制すること、「外的」が対面および携帯メールでの課題的コミュニケーションとコンサマトリーのコミュニケーションを促進すること、「外的」が自己譲歩スタイルを促進することが明らかとなった。一方、女性の場合は、「外的」が対面での課題的コミュニケーションを促進すること、対人葛藤時の強制スタイルを促進することが明らかとなった。

第8章においては、研究全体を見通した考察が行われ、さらに研究成果の応用可能性について議論された。とくに、親密さなど内発的動機とは異なる動機に基づく関係の存在が

明らかになったことから、友人関係の動機づけが、未成年の喫煙や飲酒など「仲間の圧力」の問題を理解する上で有効な枠組みになる可能性が示唆された。

以上の内容から成る本論文は、従来、心理学においては親密性やポジティブ感情などによって特徴づけられてきた友人関係について、大規模な社会調査や社会学的な言説を参照しながらその多様性に注目し、実証的研究によって解明の手がかりを得たことに大きな意義が認められる。とくに、自己決定理論を援用して友人関係の動機づけを「内発」「同一化」「取り入れ」「外的」に分類し、それらをこれまでの研究で扱われてきた親密な友人関係と、さまざまな形で指摘されてきた友人関係のネガティブな側面に対応づける著者の枠組みは、今後の友人関係研究に一定の影響を与えるものと評価できる。また、本論文においては、友人関係の動機づけの分類にとどまらず、これら動機づけの違いと友人つき合いの多さ、対面および携帯メールによるコミュニケーション、精神的健康との関連性にまで研究の幅を広げ、それぞれの動機づけと個人の心理過程や対人コミュニケーションの様相との関連性を明らかにしようとしている点も評価に値する。明確な理論的予測ができるレベルに達するには、質問紙調査以外の研究方法を用いてさらに詳細な実証的検討を積み重ねる必要があるが、その端緒となる興味深い知見も得られており、今後の発展が期待できる。

以上、本論文は優れた内容であると同時に、社会学研究科（社会心理学専攻）の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究であると認められる。よって、所定の試験結果と論文評価に基づき、本審査委員会は、本田周二氏の博士学位請求論文が本学博士学位を授与するに相応しいものであると判断する。